

CROSS

NBU総合インタビューマガジン

N-SPO

強い気持ちでゴールを狙う!

N-CUL

宇宙の可能性を信じて

Professor's ROOM

大学で育成する人間力とは

N女がゆく

プロから学ぶメイク教室

NBU COLORS

22

2019
MARCH

特集

2018年度
卒業研究・論文合同発表会



2018年度 卒業研究・論文合同発表会 最優秀賞 「機械電気工学科 稲川研究室」

2018年度の卒業研究・論文合同発表会で、最優秀賞に輝いた鶴野瑞穂さんが所属する機械電気工学科「稲川研究室」。堂々たるプレゼンテーションを行った鶴野さんを中心に、技術と情熱を兼ね備えたメンバーが、稲川直裕教授のもとで、ひとつになり、「農業被害対策用IoT検知システムの開発」に取り組みました。



IoTを駆使した箱罌で、イノシシを捕獲。

稲川 まずは鶴野さん、最優秀賞おめでとう！受賞した鶴野さんの頑張りはもちろんのこと、研究室のメンバー全員で何度も現地に足を運んで、罌の作動を確かめたり、設置場所を試行錯誤したりした努力が報われたね。

鶴野 大分県においてイノシシの農業被害額は1億円を超えています。地域の皆さんが抱える深刻な悩みを、IoTをはじめとする新しい技術を活用したものづくりで、少しでも解決したいと強く思いました。

中村 IoTを活用したシステムやサービスは増えていますね。最先端の技術が、高齢化が進む農業の現場で役に立つことがスタンダードなことになればと思います。

イム 僕は3Dプリンタを駆使して、WiFiをマイクロコンピュータに入れ込んだ箱罌検知システムを制作。これにより自動監視が実現しました。

パク 私が出身の韓国にもイノシシはいます。実際に見たこともあり、なので危険性や作物への被害などが問題になっていることも知っていました。だからこそ、少しでもシステムの開発などに活かしていきたいとチャレンジしました。

稲川 工学部の世界で学んでいる以上は、学生たちにさまざまな社会問題と向き合える知識や技術を身につけて欲しいと常に願っています。今、ものづくりの現場では、数年前まではあり得なかった技術が本当にすごいスピードで導入されています。新しいシステムにゼロから挑戦して、試行錯誤しながら課題解決に取り組んだことは、本当に素晴らしいかったよ。

諦めない心で掴んだものづくりの真髄。

鶴野 ものづくりとの出会いは、高校生の頃。NBUのオープンキャンパスで水中ロボットが展示されていたのを見て、とても感動しました。稲川先生から水中ロボットの説明をしてもらい、自分もこんな研究がしたいと思ったことがきっかけで入

学しました。正直、研究、開発の過程は苦しいこともたくさんあります。でも、座学だけでは学べない、ものづくりの本当の楽しさを実感できます。

中村 僕が研究室に入ったきっかけはドローン飛行。稲川先生からドローン技術やマイクロコンピュータ、システム設計を学びました。研究室に通ってなかったら知ることのなかった知識や技術がたくさんあります。

イム 僕もドローンの研究に興味があつて研究室に入ったのですが、そこに3Dプリンタがあった。運命の出会いでしたね(笑)。そこからは3Dプリンタの研究に夢中になってしまいました。技術的なことも学んできましたが、大分県内のいろんなところに出かけて、地域の問題や社会的ニーズを学ぶこともかけがえのない経験です。

鶴野 私は大学院に進学します。これまでの研究の成果を活かしながら、さらに地域に貢献できる活動に取り組みたいと思います。今回のIoT検知システムの技術を応用して、大学院では「リアルタイム雨量監視」を研究テーマにしました。集中豪雨などの際の雨量を的確に把握できるシステムを確立することで、川の氾

濫を未然に防ぐなど、地域防災へとつなげていきたいと考えています。将来は高校の教員を目指していますので、まだまだいろんなことを吸収していきたいですね。

中村 今回、鶴野先輩が、自分たちのプロジェクトについて、多くの人の前でプレゼンテーションをしている姿を見て、とても刺激を受けました。研究室での時間、現地での実証実験に全力で取り組むことはもちろん、その分析や成果をしっかりまとめた論文を書けるように一生懸命、頑張りたと思います。

イム 大分市にあった府内城を3Dプ

リンタを使い再現するというプロジェクトにも参加したのですが、プロジェクトを通して、日本の建築物の魅力を感じることができました。卒業後は、設計の技術が活かせる、日本の会社に就職します。韓国、日本の歴史やスタイルを融合しながら、設計の世界で、これまでにないものを完成できればいいと思います。

パク 私は水深に関するデータを自動で収集できるシステムにチャレンジしています。先日、現場での実験でようやく成果を得ることができました。まだまだ頑張らなければいけない実験が残っているので全力で取り組みます。たまにくじけそう

になることもあります。稲川先生が研究室に掲げている「即実行」、「忍耐」などの言葉を見ると不思議とやる気が湧いてくるんです。どんなことがあっても、明るく前向きに石にかじりついてでもやり遂げる精神力を身につけたいですね。

稲川 自分の能力を出し切るために、とにかく粘り強く最後までやり遂げてほしいですね。失敗してもいいので、絶対に諦めずにやり続けることが結果につながるのだと信じて。今回の受賞は研究、開発への飽くなき情熱の結晶。その想いはきっと後輩へと受け継がれていくでしょう。

テーマ「農業被害対策用IoT検知システムの開発」



平成29年度の大分県内のイノシシ農業被害額は約1.1億円。高齢化問題や見回りの手間がかかることなどが課題として挙げられていた。そこで、稲川研究室では、大分市農林水産部より研究開発を受託。イノシシ用箱罌とIoTを組み合わせ、罌の作動を瞬時に検知し、見回りの手間を軽減するため

のシステムを開発。平成30年度は大分市内3ヶ所で実証実験を実施し、イノシシを捕獲。「見回りの回数が減って助かる」、「箱罌をLINEなどで確認できる」など高い評価を得た。今後は自治体や市内企業と普及のための協議を進めていく。



工学部 機械電気工学科教授
稲川 直裕
(Naohiro Inagawa)

地震をはじめとする災害時に役立つ、防災用無人観測ロボットなどのものづくりを、民間企業や他大学などと共同でも研究。これからも社会に貢献する技術開発を目指す。



工学部 機械電気工学科4年
イム ジュンミン
(Lim Junmin)
(韓国/ソウル市出身)

3Dプリンタを駆使し、府内城を再現するプロジェクトに参加。将来は、日本の設計会社で韓国と日本の歴史やスタイルを融合させたものづくりを実現することが目標。



大学院工学研究科
航空電子機械工学専攻2年
パク チェヨン
(Park Jaeyong)
(韓国/京畿道安養市出身)

強いチャレンジ精神を持って研究に打ち込む。現在は水深に関するデータを自動収集するシステムについて研究し、さまざまな実験を重ねる。



工学部 機械電気工学科1年
中村 勇仁
(Hayato Nakamura)
(宮崎県/県立小林秀峰高校出身)

主に、ドローン技術やマイクロコンピュータ、システム設計を研究。現地での実証実験や論文に全力で取り組みたいと意気込んでいる。



工学部 機械電気工学科4年
鶴野 瑞穂
(Mizuho Tsuruno)
(宮崎県/県立日向工業高校出身)
進学先 日本理科大学 大学院

防災用無人観測ロボットを見て研究に興味を持ち、IoT検知システムについて学ぶ。今後は大学院に進み、地域へ貢献するべく研究に取り組む。

2018年度
卒業研究・論文合同発表会 優秀賞航空宇宙学科
原田研究室

NBUでは長きに渡り、凹凸のあるトンボの羽の形状にヒントを得た『マイクロ・エコ風車』の研究・開発を行っている。原田研究室の4名は『マイクロ・エコ風車』の実用化に向けた、羽根のさらなる改良、風力発電の効率化に関する研究成果を、さまざまな実験データ、検証をもとに発表した。



原田敦史准教授を囲む、左から岡林和輝さん・村上峻也さん・綾野靖峰さん・児玉侑希さん。

マイクロ・エコ風車を
未来のエネルギーへ。

児玉 今回の研究では、大きさの異なる4種類の風車をメンバーそれぞれで作りましたが、お互いの作業や課題をフォローし合いながらやり遂げることができました。卒業後は地元、大分の企業で、主に設計を担当する予定ですが、設計だけでなく、アイデアの立ち上げから組み立てまで全てに携われます。研究室で学んだ、「自分一人でも出来るというわけではない。だからこそ、仲間と一緒に全力で取り組む」という気持ちを忘れずにものづくりに向き合いたいと思います。

綾野 自分が今回担当したのは羽根の製作機器の改良でした。設計図を変更したり、部材発注を繰り返したり、夏休みも返上で夢中になって取り組みました。名古屋のエンジニアリングの会社に就職が決まりましたが、設計関係の仕事なので、今までの研究や学びが活かせると思います。最後まで諦めずにチャレンジする強い意志を仕事の現場でも活かしたいです。

岡林 当初は初めて体験する実験なども多く、作業テンポや段取りが甘いところは多かったと思います。そんな課題や問題を一つひとつ仲間と一緒に共有し、改善して

いったことが、自分たちの成長につながりました。そこで学んだのは研究にはプロセスがあり、点だけでなく線で物事を捉えることも重要だということ。社会に出て、知識や技術力をコツコツ積み重ねて、世の中の役に立つものを作りたいと思います。

村上 自分は4種類の風車のうち、一番大きな羽根を作りました。機材がすごく重く、うまくいかないこともあり苦労しました。当初は何をやっても「難しくてできない」という状態でしたが、ふと気づくと当たり前のようになっている。それはきっと継続することで達成できたと感じています。正直、原田研究室は他の研究室よりもハードワークかもしれませんが、だからこそメンタルが鍛えられ、忍耐力を身につけることができました。

原田 みんな本当に頑張った！これまでの「マイクロ・エコ風車」の研究をヒントに、君たちは手探りでゼロから始めて、諦めずにやり抜いた。この経験は社会に出て必ず活きると思います。仕事をするうえで、すごく尖った能力が必要なのではない。尖った能力は鉛筆と同じで、すぐに折れてしまうこともあります。だから社会に出て、何か一つのことを集中して尖った能力だけを身につけるのではなく、いろんなところに目を向けて同僚や先輩と一緒に

に、いろんな経験を重ね、自分自身を磨き続けていきましょう。

テーマ：「マイクロ・エコ風車の製作方法の改良と凹凸形状が効率に与える影響の解明」



太陽光や水力など、近年注目が集まっている自然エネルギー。原田研究室が取り組んでいるのは、凹凸のあるトンボの羽の形状にヒントを得た『マイクロ・エコ風車』の研究・開発。今回の発表では、風車の羽根の製作機器の改良、異なる大きさの羽根の解析などを行い、風力発電機の効率向上の可能性を示唆。マイクロ・エコ風車が災害や人手不足の農業の現場に活かされる日が、また一歩近づいた。

2018年度
卒業研究・論文合同発表会 優秀賞情報メディア学科
小島研究室

映像クリエイターとして数々の作品を手がけてきた小島教授のもと、「大分県のローカルCMの統計調査・分析」を行い、その集大成として大分東自動車学校のTVCM制作に取り組んだ「小島研究室」。優秀賞を受賞した前田裕城さんが小島教授とともに、企画立案から演出プラン・絵コンテ作成、撮影までの、一連のCM制作活動を振り返る。



ローカル愛と独自の分析力で研究に取り組んだ前田裕城さんと小島康史教授。

学生ならではの
感性をカタチに。

前田 大分県内でオンエアされているCMを調査する中で自分の中に、今までのローカルCMにない要素にこだわりたいという想いが芽生えました。ちょうどその頃、缶コーヒーや携帯電話会社の人気CMを見ていて、どれも個性的なキャラクターによる「シリーズ」での展開が面白く感じました。この手法はローカルCMではあまり使われないので、早速、プランを練って小島先生に相談しました。

小島 ローカルCMはどうしても予算やスケジュールなどの制約があります。プロの制作会社が、さまざまな問題に目を向けながら構成を考えるのに対し、前田君の場合は「こんなCMを作りたい！」という強い想いで、「自分のやりたいことをクライアントに率直に伝える」というまっすぐな気持ちで臨んだことがクライアントの心を掴んだと思うよ。

前田 自分たちのCMを制作する前に、じっくりと時間をかけてローカルCMを調査・分析したことでいくつかの気づきがありました。クライアントのロゴや効果的なサウンドロゴなどが印象に残る大きな要素だと思いき、大分東自動車学校のオリジナルを作成しました。

小島 ひと昔前は大学生が企業のCMをつくるなんてありえなかった。それができるようになったのは、昔は「技術」ありきだったものが、今ではターゲットとする若者視点での「発想」が注目されてきたからじゃないかな。SNSやWeb動画などと組み合わせるなど、TVCMにも多様性が認められる時代になってきたので、印象に残るアイデアをどんどんカタチにするのは正解だと思う。

前田 撮影は何度も打ち合わせを重ねて臨みましたがあつという間でした。出演者はもちろん、カメラマンやヘアメイクなど仲間とチームを組んで協力しながら進めました。無事に編集も終わり、オンエアを実際にテレビで見た時は感動しました。本物の現場さながらの空気感を体感することができて本当に良かったです！

小島 私も完成した作品を見て、地域の情報文化を発信するCMに大学生の発想が取り入れられるようになってきたのだと感慨深いものがあった。NBUは、「人間力教育」を掲げ、地域に向いて、実践的な学びに取り組んでいます。自ら課題を見つけてどうクリアしていくのか、社会人になる前に社会の力として活躍する機会を与えてもらえたのは、とても良い経験になったと思います。

前田 卒業後は白桦ケーブルネット株式会社で、たくさん映像作品に取り組んで

テーマ：「大分県のローカルCMの統計調査及び分析による作品制作」



限定された地域での放映が主流のローカルCM。「全国ネットでオンエアされていないにもかかわらず、話題にのぼる理由は何だろうか」という疑問をきっかけに、研究がスタートした。大分県内の民放局CMの統計調査や分析に基づき地元で好感を持たれるCMを目指し、「大分東自動車学校」のTVCMを制作。入校希望者へのアンケートによると、CMによる入校希望者の割合がオンエア前より2%上昇する結果に。

いきます。これからは「ローカル」に焦点を当てて、農業や水産業をはじめ、豊かな自然に抱かれて、人も優しい大分ならではの魅力をPRしていきます。

メイク教室「ナチュラルメイクで女子力UP！」

「美」「心」「動」「学」「和」をキーワードに活動する、女子学生のための「N女プログラム」。今回は「メイクアップ講座」を実施！

スキンケアにベースメイク：プロの技術にドキドキ

今回ご協力いただいたのは資生堂ジャパン株式会社のビューティーコンサルタントの皆様。さまざまな種類のたくさんの化粧品を使った、好感度UPのためのナチュラルメイクを教えてくださいました。

参加したのは1年生を中心とした20名のN女たち。ほとんどの学生がプロの方にきちんと教えてもらうのは初めてというなかで、「二度もお化粧したことがないんですけど、大丈夫ですか？」という学生も。

初めて目にするたくさんの種類の化粧品の数々を前に、学生たちはワクワクしている様子。

「メイクをする前に重要なのはスキンケア。メイク落としや洗顔の方法、化粧水や乳液など基礎化粧品の選び方や使用方法で肌の状態も変わりますよ。」とア

大人女子のマナー・メイクを学ぶ！

今回のN女



◀メイクには正しいお手入れもポイントです



▶プロの技を直々に教えてもらいます



◀それぞれ鏡を見ながら真剣にメイク中...

▲いつもの自分から変身した学生たち。自然と表情も晴れやかに

ドバイスをいただき、丁寧に、優しく、実際にスキンケアからスタート。学生からは「いつもはババッと済ませてました。こんなにスキンケアに時間をかけたことなかったかも...」という感想も。

スキンケアが終わるといよいよメイクアップ。化粧下地に始まり、ファンデーション、アイブロウ、アイシャドウ、マスカラ、チーク、口紅と、プロの方にアドバイスをいただきながら、自分にあつた色を選び、メイクをしていきます。「こんなにいろんな色があると迷うね」「しっかりお化粧をしながらナチュラルに仕上げる！お化粧をしないのがナチュラルじゃないんですね」

ナチュラルメイクは大人女子の身だしなみ

プロのアドバイスをもらいながら、無事にメイクが完成！メイクアップ後に撮影した写真を見て、「わー！全然違う(笑)」という声があちこちから聞こえました。

メイクアップは大人女子としてのマナーの一つとも言われます。基礎を学び、いつもと違った少し大人な自分に出会え「ますます楽しく、充実した学生生活を送れそう(笑)」というN女たち。

今後も就職活動を見据え、メイクだけでなく、マナーや身だしなみ、文化などを学ぶ、さまざまな活動を行っていきます！

大学が育成すべきは
社会に通用する“人間力”

10年ほど前から、社会全体が単に勉強ができる学生ではなく、生きる力、すなわち“人間力”がある学生を求めるようになってきました。それを受けて「大学も単位を取るだけ、専門知識を学ぶだけの場所ではない」と私自身も思うようになりました。さらに、NBUの学生を見ても「このまじやいけない」とも。彼らがこのまま社会に出てしまったらどうなるのか。大学の4年間をどう過ごすことが大切なのかを問いつづけ、大学が組織をあげて学生をサポートし、学生自身が“人間力”を養ってける「人間力育成センター」を立ち上げました。ただ、人間力を育成するには、彼らに主体性を持ってもらうことが大切。かといって、ほったらかしにするというわけではありません。活動や研究を行ううえで、答えではなく、気づきにつながるヒントを出すなどサポートは常に意識しています。

学生が地域と一緒に成長する
環境づくりを

現在、「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」などで、地域と関わることも多いのですが、私が大学と地域の関わりを深く考え始めたきっかけは、NBUの建学の精神「産学一致」。もともと自分の研究フィールドが土木や都市計画なので、地域との関係性があつたということもあるのですが、社会人基礎力も人間力の育成も、産学が一緒の目線になることが、これからの時代には必要です。地域に出かけて、単に手伝いをするのではなく、自分たちで課題を探し、解決策を導き、研究につなげる。専門性を高めるだけでは、社会に出ても太刀打ちできません。学生のうちから社会を知って、地域と一緒に成長する。そういう面では、大学COC事業の役割は大きいと思います。身につけた知識をアウトプットできるようになれば、きっと地域の皆さんの役にも立つはず。

生きていく術を身につけるために
挑戦し続けてほしい

NBUに着任してから感じたことは、チャレンジの途中で諦める学生が多いということ。何かうまくいかないと、心が折れて「やっぱり自分はだめだ」と過小評価してしまう。そのことに、すごく危機感を感じています。さまざまな活動を通して、学生には“生きる術”を身につけてほしい。大学の4年間は教職員や地域の方々から応援としてサポートしてくれるけど、社会に出たら自分で考えて動かなくてはならない。社会がどんどん変わっていくスピードに合わせて、自分で切り開いていくしかありません。どんな状況にも適応していかないといけないのです。そのマインドやスキルは、受け身では教えてもらえません。自分で挑戦し、身につけなければいけないということを学生に伝えていきたいですね。



工学部 建築学科 教授
吉村 充功

専門分野は交通計画、都市計画。未来のまちづくりや道路のあり方を研究。大学COC事業のプロジェクトに取り組み、教育推進センター長として地域創生人材の育成を目指している。2018年10月に書籍「今選ぶなら、地方小規模私立大学!〜偏差値による進路選択からの脱却〜」を共著者として出版。

#03

「学生の“生きる力”を育む
大学のあり方を考える」

立ち上げにも大きく関わった「人間力育成センター」は、NBU開学50余年の歴史において、地域社会に開かれた大学へと変貌していくうえで、大きな役割を果たしている。大学が専門知識を学ぶだけの場所ではなくなった今、吉村教授の考える大学での学び、地域社会に求められる大学のあり方を伺った。





今注目のスポーツ選手をご紹介します！

i-SPO
Soccer

経営経済学部 経営経済学科2年

東海林 佑飛

“ゴールを決める”
強い気持ちは
誰にも負けない



しょうじ ゆうひ(愛媛県/県立宇和島東高校出身)／常に「自分がシュートを決める」という強い気持ちは、機敏性に優れたプレースタイルが特徴。2年生ながらも圧倒的な決定力で、チーム得点王としてチームを引っ張る存在。

の期間も大切に使う」。その姿勢が彼の強さを作り上げているのだろう。

4月からの九州リーグやIリーグ、チャレンジリーグの開幕に向けて着々と準備を進めるサッカー部。今後のチームの目標は「全国制覇」。そのためには常に勝ち続ける“常勝軍団”でありつづけていなければならない。「とにかく点を取りたい。実は、自分がゴールを決めた試合では負け知らずなんです。たまたまかもしれないですけどね(笑)」。

彼が大事にしているのは、シンプルに結果を求め続ける強い気持ち。「身長170cmと、恵まれた体格でもないし、天才でもないし、特別な技術があるわけでもない。でも気持ちや向上心ではだれにも負けない」とまっすぐな瞳で語る東海林さん。サッカー人生の最終目標は「プレミアリーグ」でプレーすること。どんなに周りに無理だと言われても、小学生の頃からの夢は変わらない。そんな熱い心をもってプレーする彼の根底には「何よりサッカーが好きだ」という強い思いが感じられた。

自分の未来を
宇宙の可能性に
託して

工学部 航空宇宙工学科2年

本田 桜子

Space

i-CUL

次世代のエンジニアはキミだ！



り、モチベーションになっていると語る。他人から何と言われようと自分の信じる道を突き進む性格の本田さんの性分。「積極的に意見を出していかないと良いものをつくることはできない。プロジェクトチームにはお互いの意見をちゃんと言い合える相手、仲間がいる。そういう点でも、NBUはすごく良い環境だと感じます」。

将来は宇宙に関する企業への就職を目指している。「今までプログラミングを必死で勉強してきた。だから、それを活かすことのできるIT関係、人工衛星などのプログラムに携われたらいいですね」。そのためにも、大学の授業はもちろん、競技会などを通じて宇宙開発の現場で通用する力を身につけたいと意気込む彼女。「自分の力を示すものを身につけないと企業にアピールできませんから」。彼女の言葉の端々には、意志の強さが感じられる。「将来の選択肢を増やすためにも、今からいろいろなことを経験し、チャレンジしていきたいですね」。バイタリティー溢れる本田さんが残りの2年間、どんな道を歩み続けるのか注目したい。



ほんだ さくらこ(福岡県/福岡雙葉高校出身)／NBUの先輩の誘いがきっかけで「宇宙エレベーターロボット」プロジェクトチームに参加した。今後メンバーを増やし、技術力も高め、4年次までに参加できるよう目指している。

地上と宇宙をつなぐ夢の輸送機関である宇宙エレベーター。その技術などの開発・促進のために、開催される競技会が「SPEC (SPace Elevator Challenge)」。大きな宇宙開発の足がかりでもある競技会への参加を目指すNBUチームの一員としてプログラミングを担当する本田桜子さん。1年生の頃は別のプロジェクトチームにも参加していた本田さん。宇宙エレベーターのプロジェクトにはプログラマーがいないと知り、自らの活動の場を広げることができるのではないかと感じ、チャレンジする決意を固めたという。

そんなアグレッシブな本田さんだが、実はNBUに入学する前に、救急救命士を目指して他大学で1年間学んでいた。自らが掲げる「将来、何か人の役に立つ仕事を」という思いのもと授業を受けていたものの、次第に自分のやりたいことは違うのではないかと違和感を覚えるようになった。「より多くの人を助けたり、世の中の役に立つもっと大きなことを…」と考えていた時、見つけたのがNBUの航空宇宙工学科だった。「もともと宇宙に興味もあったので、自分の可能性を信じて入学しました」。

多くの人類の夢と可能性が詰まった宇宙エレベータープロジェクト。徐々に開発も進んでいるとはいえ、実現に至るのは遠い未来のことかもしれない。「将来、宇宙に本当に関わることができるのか…」と思うこともあるが、他大学の学生と同じイベントに参加した際に、NBUの航空宇宙工学科だと伝えると「NBUなら大丈夫だよ」と太鼓判を押されることもあ

様々なフィールドで活躍する
NBU生の「リアル」に密着。
学生が描き出す、色とりどりの世界を
ご紹介します。

NBU

COLORS



09

経営経済学部 経営経済学科4年
上米良 千尋
(大分県/大分高校出身)

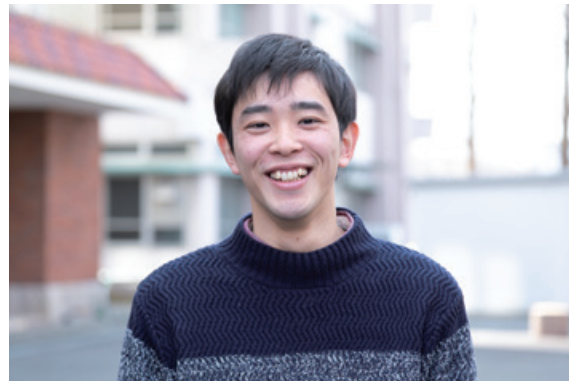
全ての原動力は 小学校教諭への熱い気持ち

中学校教諭として働く叔母の姿を見て、自然と学校の先生を志すようになった上米良千尋さん。入学後、小学校教諭について勉強を重ねていくうちに、「小学校の先生になりたい」と、さらに明確なビジョンを持つようになった。普段の授業と別にNBUが教育連携する「姫路大学 教育学部 こども未来学科 通信教育課程」の科目を履修し、小学校教諭一種免許取得。小学校教育の方針に共感して、福岡県の採用試験にチャレンジし、見事に現役合格を果たした。NBUでは、地域活動やアルバイトなどにも励んだ。険しい道に心が折れそうになりながらも、挫けなかったのは「絶対小学校の先生になる!」という強い想いだけだった。もともとは教育学部志望だったが、NBUに入学したことで、教育だけでなくさまざまな分野を学び、自分の夢を実現させることができたと。「今後は中高一貫校も増えてくる。ゆくゆくは中学校の教職免許も取得したい。」と将来を見据え、明るく晴れやかな表情で話してくれた。



【自慢の1カット】

「初任者研修や初めての一人暮らしなど、着任してからもしばらくは修行です」と言いつつも、4月からの教員生活に胸をふくらませる上米良さん。その目ばとても輝いていた。



10

工学部 情報メディア学科4年
前田 涼
(大分県/県立大分南高校出身)

授業を通して見えた 自分の“本当にやりたい仕事”

もともとバラエティー番組は大好きだったが、「情報メディア学科を選んだのは、これからの時代、インターネットに詳しい方がいいかなと思っただけだった」という理由でNBUに入学。初めからメディア業界への就職を目指していたわけではなかった。しかし、授業の中で、宗麟大橋の開通イベント、地元のアンプティーサッカーチームなどをテーマにした映像の制作に関わっていくうちに、映像分野の仕事に就きたいという目標を抱くようになった。自らテーマを探し、企画を立て、メンバーを集めて…と、たった3分の動画のために、1ヶ月も前から準備。いざ撮影現場では、音声やカメラマンに事細かに指示を出す。映像を作る大変さ、楽しさを体感し、本当に興味があるものを再発見することができた4年間だった。「テレビの魅力を再認識してもらおうと同時に、県外の人に大分って楽しそう!と思ってもらうのが夢」。インターネットの普及でテレビが面白くなったと言われる時代。想いの詰まった映像で視聴者の心を揺り動かして欲しい。



【自慢の1カット】

自分が新聞で見つけた一つの小さな記事から企画し、制作した映像作品が完成したときの感動が映像分野での就職へつながった。



11

工学部 機械電気工学科4年
西田 圭祐
(大分県/県立杵築高校出身)

すべてが研究段階 答えを導く楽しさの虜に

一般的にテレビなどの電化製品で耳にすることが多いプラズマ。まだまだ解明されていないことが多く、近年は医療分野などにも役立てるべく、研究が進められている。父の仕事の影響でなんとなく電気系の学部に進んだ西田さんだが、3年次にプラズマに関する授業を受け、その面白さからプラズマを専門とする研究室に。すぐさまプラズマ研究に魅了された。「プラズマを照射することで、なぜ水中に流れが発生するのだろうか」。疑問に思ったことを解明するために、実験の条件を変えるなど、試行錯誤しながら研究する。プラズマ研究の面白さに取り憑かれてからは、ただただ研究に没頭する毎日が続いた。卒業後は熊本大学の大学院に進学し、引き続きプラズマ研究を進める。プラズマ照射による水中での流れの原理を解明し、医療分野に活用できれば…、まだまだ研究のゴールは遠いかも。膨大なパズルのピースをうめるように、地道でひたむきな彼の研究姿勢が、プラズマの謎を解き明かしてくれるだろう。



【自慢の1カット】

現在は「プラズマ照射による水中の流れを可視化するために使用する界面活性剤の影響について」研究中。未知の可能性を秘めた「プラズマ」の研究はまだ続いている。



12

工学部 建築学科4年
ルイス フィエロ ウェンディー
(メキシコ/日本文理大学 別科日本語課程出身)

日本での生活が 未来の選択肢を広げた

別科日本語課程の入学式の際に、通訳を担当し留学生へのサポート活動も行うルイスさん。「入学したばかりの頃、科目の選択で困っていたら、留学生の先輩が助けてくれました。だから今度は自分が先輩たちを助けてあげたいんです」。通訳だけでなく、日本での生活のアドバイスも行っている。そんなルイスさんも、日本に来たばかりの頃は、風習の違いに困惑することも多かったという。しかし、大学生活を通して日本の文化や生活などに触れ、考えが広がっただけでなく、将来の展望も開けた。現在は建築学科で建築設計について学ぶ傍ら、大分市内で設計やリノベーションを手がける会社でアルバイトをしている。日頃から建築のプロのもとで、刺激をもらう中で、「将来は日本に残り、建築のプロとしてのキャリアを積みたい」という思いを抱くように。メキシコにいた頃から建築への興味はあったものの、日本に来てその思いが強くなった。近い将来、日本とメキシコの建築を融合させた素晴らしい建築家が誕生するかもしれない。



【自慢の1カット】

少しでもメキシコの文化に触れ、興味を持ってもらいたいと、10月に行われるNBUの学園祭「一本祭」ではメキシコ出身の学生たちと一緒に「タコス」の模擬店を出店。

キラリびと

NBUのキャンパス内で「キラリ」と輝くあなたを発見!



経営経済学部 経営経済学科3年

山口 美歩

(長崎県/長崎日本大学高校出身)

「身体を動かすのが大好きだから、スポーツに関係する仕事に就きたいです」と、ハツラツとした雰囲気の中、山口美歩さん。中学・高校はバスケット部でプレーヤーとして活躍し、大学に入ってからマネージャーとして選手をサポート。「NSCA I C P T」というパーソナルトレーナーの資格を取得し、選手のパフォーマンス面からメンタル面までを支えている。プライベートでも、いろんな場所に出かけ、キャンプやバーベキューなどを楽しむアウトドア系女子。

CROSS

NBU 日本文理大学

〒870-0397 大分県大分市一木1727
TEL 0120-0971593

大学院 工学研究科

工学部

経営経済学部

□ 環境情報学専攻 □ 航空電子機械工学専攻

□ 航空宇宙工学科

□ 機械電気工学科 □ 建築学科 □ 情報メディア学科

□ 経営経済学科

公式サイト

www.nbu.ac.jp

CROSSサイト

cross.nbu.ac.jp